

第一回 はじめに

まずは、小話から。

大勢の修学旅行者で賑わう奈良の東大寺、その南大門で聞いたお話です。男女の高校生を前に、中年のガイドさんが、マイクを握って『みなあ——さん、ここの階段、気を付けて下さいね。お寺の階段（怪談）は、暗くて、怖いですからね。』と、話しますと、大爆笑でした。それを横目に引率の初老の先生、笑い転げる高校生を尻目に、『オレは、階段より廊下（老化）の方が、怖いワ』と呟いたとの事です。

さて、この小話、昔は、大いに笑っていましたが、この頃、もう笑えない年代に私達（第一期生）は、なって来ているのです。今年で、古希を迎える私は、自分が、古希になる事が、信じられない気持ちでいっぱいなのです。何だか、いつの間にか「なってる」と言う感じがしているのです。

ところで、今年の初めでしたか、同窓会の会長さんから、今までの自分の人生を振り返って、思いつくままに履歴話としてエッセイの様なものを書きませんか、との相談がありました。色々考えたのですが、頭がボケない内に、チャレンジしてみようかと言う気持ちになりました。読みづらい、ぶっきらぼうな文章になるかも知れませんが、その点は、お許しを。そして、お時間がございましたらお付き合い下さい。

さて、私は宇部高専第一期生の一人であります。機械工学科B組でした。1967年3月に卒業して、来年2017年3月には、卒業50周年を迎えます。一言に50周年と簡単に言いますが、もう、そんなに時が経ってしまったのかと、驚くばかりです。それが、一言で言える率直な50周年の感想です。

その50年間を通して、今まで大きな事故も、怪我も、病気もなく、生きて来た事は、誠にありがたい事と思っています。

さて、現在、私は北米のカナダの西海岸、人口250万人のバンクーバーと言うカナダで3番目に大きい都市に住んでいます。多分、一度は、聞いた事のある都市だと思います。もう足かけ48年になりますが、なぜ、この地に住むようになったのか、昔の事を思い出しながら、書いてみようと思います。

ただ、一つだけ、冒頭の文として、お断りして置きますが、最近の世界のIT革命、技術革新、国際間の流動的な変化、国際化の推移、等、想像以上に早く進歩していて、正直なところ、私の頭では、深く理解も出来ず、そのスピードには、到底ついて行く事が出来ない状況です。ですから、私の話は、単に同窓生の一人が経験した平凡な普通の人間の日常話として、受け止めて下さい。それ以上でもなく、それ以下でもない、実際に、自分の身の上で起こった体験を基にして、少々偏見に満ちているかも知れませんが、そのまま書くことにします。その点をご承知下さい。何しろ、今の私は、平々凡々な、リタイア生活を送っている年金生活者であります。それに、専門的な学問を修めた者でもなく、ましてや、故郷を離れて大成功した者でもありません。ですから、立派な事は言えません。70歳の一人の爺さんの小話として読んで下さい。お願い申し上げます。尚、文章に読み難い点があると思いますが、それは、少し、ボケが始まっているのではないかと、笑って通り過ぎて下さい。

ところで、話題を急に変えますが、『ふるさと』と言う小学唱歌を覚えているでしょう。そう、あの、うさぎ追いしかの山 小鮒つりしかの川 夢はいまも めぐりて 忘れがたき ふるさと、です。そして、その三節に、こころざしを果たして いつの日にか 帰らん 山はあおき ふるさと 水は清き ふるさと・・・。良くこちらの日系人社会の会合で歌われる懐かしい歌であります。また、日本のテレビでも、多くの日本人が、遠く離れた地でふるさとを懐かしんで涙を流しながら歌っているシーンを、放送していますね。

でも、実を言いますと、私は、自分の故郷、小倉は懐かしいとは思いますが、涙を流すほどの気持ちには、なれません。多分、この歌が出来た時は、大正3年、西暦で言いますと1914年頃でしょうか、もう100年も前の事です。メロディーは、素晴らしく思うのですが、歌詞の内容には、全く感動を覚えないのです。確かに、100年前の頃は、ふるさとに対してそう言う気持ちがあった事でしょう。俗に言う海外に出た人達の夢が、『故郷に錦を飾る』であったのかも知れません。でも、時代は変わり、今そう言う感情をふるさとに求める事自体が、消滅したのではないのでしょうか。現実的には、今の日本に、故郷を求める事は、おそらく不可能な事だと思います。社会は、常に流動しているのです。

ふるさとを出て、日本の他の地域で生活し、年老いて、再びふるさとに帰らんとする人達は、現代の世の中に、どれほどの人がいるのでしょうか？浦島太郎のお話ではありませんが、例え、戻ったとしても、そこには、もう自分が想っていたふるさとはなく、違う現実があると思います。

それでは、一体、あなたにとってのふるさとは、どこですかと問われますと、今の私にとって、ふるさととは、ここバンクーバーだと思っています。何故ならば、育った小倉、学生時代を過ごした宇部、そこには、もう私の覚えているふるさとはないと感じています。ふるさとは遠きにありて想うものと言うのが本当の気持ちだと思います。48年間住み続けているこのバンクーバーこそが私のふるさとなのです。勿論、ふるさと小倉は、いつも自分の心の中にあると思います。ですから、ふるさとは忘れていません。でも、いつか帰ろう！ いつか帰ろう！ なんて、そんなに強く思わないのです。世界のどこに住んでいても、いつでも帰れます。昔は、本当に大変でしたが、現在では、どこに住んでいても、いつでも帰れます。勿論、お金の都合と、健康であればのお話ですがね。

ところで少し古いお話ですが、戦前、カナダに出稼ぎに来ていた日系人の男性は、お金を貯めて、故郷に錦を飾る事が、一生一代の夢だったと聞きます。正直、私も、その話の影響を受けて自分もそうなりたいたと、最初の頃は思っていました。でも、カナダの生活を通して、時代も、考えも、社会も変化して、もうそう言う夢は消えてしまいました。何しろ、実際、バンクーバーの自宅を出て飛行機に乗り、成田で乗り換えて福岡に飛び、そこから、新幹線で小倉に行き、タクシーで帰っても、16時間以内で実家に帰れるのですからね。100年前でしたら、それは、それは、大冒険の長旅となった事でしょう。もう時代が違うとしか言えません。話のついでに、こちらで知り合った友達の事を書きましょう。

彼は、札幌で病院を開業しているお医者さんなのですが、2ヶ月毎に、日本と、カナダを行き来しています。奥さんは、カナダの生活が気に入って、息子さんもこちらにいて、彼は、仕事のため、日本へ出稼ぎに行っていると言う感覚なのです。日本に2ヶ月間、そして、こちらに、2ヶ月間を繰り返しているのです。もう一人の女性は、弟さんと分担して、高齢の母親を同じように、2ヶ月毎に、日本とカナダを行

き来して世話をいます。ですから、もう昔とは、全く次元の違う状態なのです。

ところで、私の様に、日本を離れて、外国で生活する事になった者には、大きく分けて二つのタイプがあると思います。勿論、詳しく言えば、もっともっとありますが、私見ですが、その一つのタイプは、自分の意志で、日本から出て外国の地に住む事を決心したタイプ。そしてもう一つは、仕事の都合、会社からの辞令で知らない海外へ行き、そのままその国に住みついてしまったと言うタイプです。勿論、長い間、海外で働き、その後、日本へ戻り、リタイアしてから、再び、海外へ出たと言う方々もいます。さて、私の場合は、まさに、この前者のタイプに当たります。私は、自分の意志で日本を出た者なのです。それに至るまでには、自分なりに、色々な葛藤がありました。

カナダの古い国旗と新しい現在の国旗です。新しい国旗は、1965年に制定されました。



英国連邦の一員であるためにイギリスの国旗が入っています。新しい国旗は、左の赤地は、太平洋、右が大西洋を表し、国木のメープル（かえで）の葉がカナダの国を表し、白地は雪の大地を表しています。古い国旗に比べて新しい国旗は、とてもシンプルです。また、国歌も、以前はイギリスと同じ国歌『God save the King』でしたが、今は『O Canada』（おーカナダ）です。（正式に、1980年に制定されました。）

-- 次回へ --